

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：35404

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20031

研究課題名（和文）英語の派生形容詞に生じる解釈強制の原理と仕組みの解明

研究課題名（英文）Principles and Mechanisms of Semantic Coercion for the Interpretation of Derived Adjectives in English

研究代表者

石田 崇 (Ishida, Takashi)

広島修道大学・人文学部・助教

研究者番号：90907007

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語の派生形容詞による名詞修飾表現を分析対象とし、次の3点を明らかにした。（1）限定用法しか持たないといわれる関係形容詞（RA）が述語位置に現れる理由には、従来議論されてきた要因に加え、名詞の特質構造が関係する。（2）RA+N表現（例：atomic bomb）とN+N表現（例：atom bomb）は完全に同義であるとされてきたが、RAの派生分析に基づくと前者の方が解釈の幅が狭い。（3）語彙化した-ed形容詞による名詞修飾表現（例：forked road「分かれ道」）の特殊な意味は、代表者の博士論文（Ishida 2021）で提案された名詞修飾の仮説に基づくと合成的に得られる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は次の3点である。（1）形態論分野において、形容詞を基盤とした研究は極めて少ないため、当該研究分野に対する貢献が大きいことが期待される。（2）他の複雑語に比べて、派生形容詞の研究は遅れていると指摘される中、本研究の成果は、未開拓の部分が多い派生形容詞の性質を解明するだけでなく、英語形態論の内部構成に関する理解をより一層深めることにもつながる。（3）形式と意味の間のずれについて議論される中、なぜそのようなずれが生じるのかという言語学上の問いに対し、形態論と意味論それぞれの既存の理論を統合した独創的なアプローチによって、より原理的な説明を与えられる。

研究成果の概要（英文）：This study analysed noun modification by derived adjectives in English and revealed the following three points. (1) The appearance of relational adjectives (RAs) in predicate position, which are known as attributive-only modifiers, is related not only to factors discussed in previous studies, but also to the qualia structures of the head nouns. (2) It has been thought that the expressions RA+N (e.g. atomic bomb) and N+N (e.g. atom bomb) were fully synonymous, but the analysis based on the derivation of RAs suggests that the former has a narrower range of denotation. (3) The unique meaning of noun-modifying expressions using lexicalised -ed adjectives (e.g. forked road) can be compositionally obtained based on the hypothesis, proposed by the principal investigator's (Ishida 2021) doctoral dissertation on noun modification.

研究分野：人文学・言語学・英語学

キーワード：名詞修飾 派生形容詞 名詞由来形容詞 関係形容詞 形容詞化 解釈強制 意味論 形態論

## 1. 研究開始当初の背景

形容詞による名詞修飾は、一般的に、2つの修飾タイプに分類される。以下では、まず、この2分類について(1)で概観し、次に、(1)の観点のみでは説明できないような事例を(2)で観察する。最後に、研究代表者による日本語の性質形容詞の研究について(3)で触れる。

### (1) 名詞修飾の2種類

形容詞による名詞修飾には、通常、名詞が表す指示対象を形容詞が叙述する修飾と、名詞が表す概念のタイプを形容詞が分類する修飾の2種類あるとする見方が一般的である(Cinque 2010など)。ここでは、前者を「叙述型修飾」、後者を「分類型修飾」と呼ぶことにする。例えば、*old friend*における*old*は、叙述型修飾では「年をとった友人」、分類型修飾では「古くからの友人、旧友」と解釈される。前者は叙述形式(*the friend is old*)と交替可能だが、後者は意図した解釈を得られないため交替不可である(*the friend is old* ≠ ‘*a friend for a long time*’)。このように、*old friend*は表面上の形式は単一でも、*friend*という名詞が持つ「年齢」と「関係性」のどちらの特性を*old*が選択するかによって、2種類の異なる修飾関係を持つ。

### (2) 名詞側に生じる解釈強制(N強制)

解釈強制(Coercion)とは、特定の統語環境において、言語表現の意味的な衝突を回避するための解釈上の補正プロセスのことである(Pustejovsky 1995など)。例えば、*a bright bulb*は「明るく光る電球」という意味を表すが、*an opaque bulb*は「暗く光る電球」ではなく「曇りガラスの電球」という意味を表す。この場合、*bulb*という名詞は、前者の「明るく照らす」という機能特性から、後者の「電球のガラス部分」のような形式特性へと、解釈上、補正されている。以降では、名詞側に生じる解釈強制のことを「N(oun)強制」と呼ぶことにする。

### (3) 日本語の形容詞側に生じる解釈強制(A強制)

研究代表者を含むIshida and Naya (2020)は、本来、叙述型修飾をしない日本語の性質形容詞が、その特性を満たさないように見える事例を指摘した。例えば、「明るい味」では、「味」に「明るい」が修飾できる特性がそもそもないため、上記(2)のようなN強制は生じ得ない。また、当該表現の文脈上意図された意味は、「明るい地方の料理の味」である。ここで、「明るい」には、当該形容詞が本来要求する叙述型修飾と、味のタイプを決める分類解釈との間にずれが生じているが、このずれは、当該形容詞が、本来叙述する対象(この場合「地方」)を文脈に依存しながら、解釈上、補正されることで解消されていると説明できる。以降では、このように、形容詞側に生じる解釈強制のことを「A(jective)強制」と呼ぶことにする。

## 2. 研究の目的

上記の(1)と(2)のような研究背景から、名詞修飾は、従来、修飾対象である名詞を中心に考えられ、N強制が扱われてきた。これに対し、(3)の研究は、新たに、修飾要素である形容詞を分析の中心に据え、A強制の可能性を指摘している。本研究の目的は、英語の派生形容詞を基盤として、(3)のような現象を含む名詞修飾表現一般について体系的な考察を行うことである。

## 3. 研究の方法

### (1) 名詞修飾における解釈強制に関わる現象に関する記述

名詞修飾表現における解釈強制(N強制およびA強制)について、形容詞が名詞を直接的に修飾していないような事例をコーパスやOEDから収集し、当該現象の記述的一般化を行う。例えば、*an adjectival analysis of cardinal numerals*という表現は、「基数詞が形容詞(的)であるとする分析」という意味を表すため、この場合の*adjectival*は*analysis*を直接的に修飾していないことが指摘されている(菅原 2013)。また、*wooded hill*は「森がある丘」を表すが、*forked road*は「フォークがある道」ではなく「分かれ道」という特殊な意味を表す。この場合の*forked*も名詞と直接的に意味関係を結んでいるとは思えない。以上のような指摘や観察を手掛かりとしながら、名詞修飾における派生形容詞に関わる解釈強制の事例を記述・整理し、特に、A強制に関わると思われる事例について、派生形容詞と名詞との間の修飾関係の仕組みを明らかにする。

### (2) 仮説の検証と一般化

(1)を継続しながら、研究代表者が博士論文(Ishida 2021)で提示した「名詞修飾に関わる形容詞は、それ自身が修飾要素として本来要求する特性を満たす形で解釈されなければならない」という仮説を英語の派生形容詞に適用・検証し、経験的・理論的帰結を探求する。例えば、*dogged persistence*は「不屈の粘り強さ」を表すが、*dogged*は*persistence*を直接的に修飾していないように見える(#犬化された粘り強さ)。*dogged*は*dog*という名詞を基体としてつくられた要素であるが、当該要素が形容詞と名詞のどちらであるかについては、未だに議論の余地がある(Spencer 2018など)。このような形態論の観点は、上記の仮説の検証にとって重要な論点となる。

#### 4. 研究成果

本研究に関わる研究活動として、まず、2019~2020 年度特別研究員奨励費の助成を受けた研究課題「特異な表現の修飾に関する日英語対照研究：A-N 表現における形式・意味・機能」(19J10598) が挙げられる。研究代表者は、当該研究課題において、(i) 特異に思われる名詞修飾表現における解釈メカニズムおよび (ii) 名詞修飾表現における左側要素（形容詞）の性質について研究を遂行した。本研究においても、(i) ならびに (ii) は共通した研究テーマである。主な成果について、以下の3点にまとめる。

##### (1) 関係形容詞による名詞修飾

英語の形容詞には、名詞を基体 (base) として派生される関係形容詞 (Relational adjectives; 以下、RA) と呼ばれるタイプがある (例: *chemical* (< *chemistry* + *-al*), *dramatic* (< *drama* + *-tic*), *oceanic* (< *ocean* + *-ic*)。RA の主機能の1つは、名詞を修飾し、その「分類」をすることである。例えば、*chromatic drawings* における *chromatic* は、*drawings* を分類する RA である。一方、*beautiful princess* の *beautiful* は、*princess* を叙述し「姫」の属性を述べる (例: *The princess is beautiful.*)。従って、RA は、属性叙述を主機能とする性質形容詞とは、述語位置に生起できるかどうかという点で大きく異なる (例: *\*Those drawings are chromatic.*)。しかし、一定の接頭辞が付加した RA (例: *monochromatic*, *antisocial*) はこれを許す (例: *Those drawings are monochromatic.*) (Levi 1978)。Ishida (2020) は、このような接頭辞つきの RA に関して、一般に限定用法しか持たないといわれる RA が述語位置に現れるのはなぜかという点について、対比性 (Contrast) によって修飾要素である RA のみが焦点化され、前提となっている主要部名詞が文脈上補われる形で解釈が行われるからであり、接頭辞は、まさにこの対比性を喚起する役割を担っていることを明らかにした。

Ishida and Naya (2021) は、この内容を発展させ、日本英語学会第 14 回国際春季フォーラム (2021 年 5 月、於: zoom) で発表し、従来の研究で議論されてきた要因 (本来の修飾対象である主要部名詞の削除と対比性) に加え、名詞の特質構造 (Qualia Structure) が関係することを論じ、この観点から上記の問いに答えた。当該発表は学会で高く評価され、「優秀発表賞 (佳作)」を受賞した。Ishida and Naya (2022a) はこれを論文化したものである。

また、英語の「関係形容詞+名詞」表現 (以降、RA-N) (例: *industrial output*) と「名詞+名詞」表現 (以降、N-N) (例: *industry output*) は、従来、完全に同義であるとされてきた。Ishida and Naya (2022b) は、RA の派生に関する分析 (Nagano 2013) に基づき、RA-N の方が N-N よりも一定の解釈に限定されやすい (あるいは、解釈の幅が狭い) と予測されることを論じ、両表現で可能な解釈を比較することで当該予測を検証した。その上で、両表現は実際にはどのような意味で「同義」であると言えるかという点に対して新たな示唆を提示した。

##### (2) -ble 形容詞による名詞後位修飾

石田 (2022) は、英語の形容詞による名詞修飾のうち、-ble (-able/-ible/-uble) という派生接辞によって形成される形容詞類 (例: *conceivable*, *possible*, *soluble*; 以下、-ble 形容詞) が名詞後位修飾 (postnominal modification) をする際、被修飾部である名詞句の限定詞が強い限定詞 (*every*, *all*, *the most* など) とは共起するが、弱い限定詞 (*some*, *many*, *no* など) とは共起しないという事実について、モダリティ (Modality) によって引き起こされる解釈強制 (Coercion) の観点から説明した。

具体的には、名詞を後位修飾する場合には、根源的モダリティ (Root modality) を表すこととなる -ble 形容詞の「当該状況全体を量化する機能」に目を付け、(強い限定詞と違って) 弱い限定詞は修飾対象となる状況を有界化できないため、そもそも量化する前提が成り立たず、したがって、-ble 形容詞は弱い限定詞とは共起できないことを主張した。

##### (3) -ed 形容詞による名詞修飾

石田 (2023) は、*forked road* 「分かれ道」や *dogged persistence* 「不屈の粘り強さ」のような語彙化した英語の -ed 形容詞が表す特殊な意味に注目し、当該意味は、Takehisa (2017) が主張している関係名詞 (Relational Noun; 以降、RN) を基体名詞とする派生分析 (RN ではない基体名詞は RN へ強制されるという分析) と、Ishida (2021) が提唱した名詞修飾に関する仮説 (名詞修飾における修飾要素はその本来的な特性を維持しているという仮説) の 2 つを統合させることで捉えられることを明らかにした。

具体的には、-ed 形容詞の基体名詞は、解釈上、RN 相当名詞と複合形容詞を成しており、意味的に希薄な主要部である RN は、名詞句や名詞修飾要素でよく見られる「全体を部分で表す」というメトニミーによって省略されることで解釈強制が生じていることを明らかにした。このような分析によって、実際には、問題となる -ed 形容詞においてもなお、-ed 接辞に本来的な装飾的意味 (ornative sense) は維持されており、この点で他の一般的な -ed 形容詞と変わらないことになる。

<引用文献>

- Cinque, Guglielmo (2010) *The Syntax of Adjectives: A Comparative Study*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Ishida, Takashi (2020) “Prefixed Relational Adjectives in English,” *JELS* 37, 38–44.
- Ishida, Takashi (2021) *A Construction Grammar Approach to Noun Modification by Adjectives in English and Japanese*, Doctoral dissertation, University of Tsukuba.
- Ishida, Takashi and Ryohei Naya (2021) “Why Does Contrast Allow Relational Adjectives to Be Used Predicatively? A Qualia Structure-Based Account,” paper presented at ELSJ 14th International Spring Forum 2021, 8–9th May, online (via Zoom).
- 石田崇 (2022) 「名詞後位修飾の-ble 形容詞が表すモダリティと限定詞制約」『時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告』, 和田尚明・渡邊淳也(編), TAME 研究会, 77–102.
- Ishida, Takashi and Ryohei Naya (2022a) “Why Does Contrast Allow Relational Adjectives to Be Used Predicatively? A Qualia Structure-Based Account,” *JELS* 39, 171–177.
- Ishida, Takashi and Ryohei Naya (2022b) “*Presidential Company* vs. *President Company*: Very Subtle but Crucial Semantic Differences Between RA-N and N-N,” *Tsukuba English Studies* 41, 19–32.
- 石田崇 (2023) 「名詞由来の-ed 形容詞に生じる解釈強制についての予備的考察」『広島修大論集』 63(2), 55–71, 広島修道大学ひろしま未来協創センター.
- Levi, Judith N. (1978) *The Syntax and Semantics of Complex Nominals*, Academic Press, London.
- Nagano, Akiko (2013) “Morphology of Direct Modification,” *English Linguistics* 30(1), 111–150.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 菅原剛 (2013) 「英語形容詞の名詞前位修飾における形式と意味のミスマッチー新たなタイプの「形容詞+名詞」表現に対する生成語彙論的アプローチ」『レキシコンフォーラム No. 6』, 影山太郎(編), 269–284, ひつじ書房, 東京.
- Spencer, Andrew (2018) “Review Article: *Lexical Structures: Compounding and the Modules of Grammar*,” by Heinz J. Giegerich, Edinburgh University Press, Edinburgh, 2015,” *Word Structure* 11(2), 254–276.
- Takehisa, Tomokazu (2017) “Remarks on Denominal -Ed Adjectives,” *Proceedings of the 31st Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 196–205.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 石田 崇	4. 巻 -
2. 論文標題 名詞後位修飾をする-ble形容詞のモダリティと限定詞制約	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告	6. 最初と最後の頁 77-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Ishida, Ryohei Naya	4. 巻 39
2. 論文標題 Why Does Contrast Allow Relational Adjectives to Be Used Predicatively? A Qualia Structure-Based Account	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 171-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Ishida, Ryohei Naya	4. 巻 41
2. 論文標題 Presidential Company vs. President Company: Very Subtle but Crucial Semantic Differences Between RA-N and N-N	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田 崇	4. 巻 63
2. 論文標題 名詞由来の-ed 形容詞に生じる解釈強制についての予備的考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 広島修大論集 = Studies in The Humanities and Sciences	6. 最初と最後の頁 55~71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15097/00003342	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takashi Ishida, Ryohei Naya
2. 発表標題 Why Does Contrast Allow Relational Adjectives to Be Used Predicatively? A Qualia Structure-Based Account
3. 学会等名 ELSJ 14th International Spring Forum 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石田崇
2. 発表標題 名詞由来の-ed形容詞が表す意味について
3. 学会等名 第10回筑波英語学若手研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------